

職業作家ポウプ？

——カールとの対比から見える新しい詩人観——

福 本 宰 之

序

Alexander Pope が嫌った出版業者と言え、まず誰もが Edmund Curll の名を思い出すであろう。彼はその経歴の早くから、低級なポルノまがいの作品を出版し続け、1729年に出た3巻構成の合注版 *The Dunciad* の第2巻においても、最初の徒競走と次の小便飛ばし競争に立て続けに勝利し、ポウプから “shameless Curl” (171) と呼ばれている。一方カールも負けておらず、同じ1729年に *The Curliad: A Hypercritic Upon The Dunciad Variorum With a Farther Key to the New Characters* というパンフレットを出版し、自らの潔癖を世に訴えている。無論カールを敵視したのはポウプだけではない。彼は、低俗な作品を出版しただけではなく、著者に無断でその著作を出版するやら、旧版の表紙だけを付け替えて新版として売り出すやらで、当時の文学者からは概ね嫌われていた。

ところが最近の研究では、ポウプとカールについては「敵対関係にあった」と単純に片づけられるものではなく、むしろ「共生関係にあった」とする見方が有力である。⁽¹⁾ポウプは生活の糧を得ることを主目的に著作を行う三文文士を軽蔑する、所謂 gentleman poet の階層に属していたが、前述の説の前提としてあるのが、実は彼を著作権や本の売れ行きを気にかける経済人と捉える新しいポウプ観である。本稿では、この新しいポウプ観を踏まえ、先行研究とは異なる視点からポウプに見られるカールの要素を発掘し、新しいポウプ観を検証してみたい。

I

出版屋カールが得意とした分野の一つに伝記があった。彼は有力者や著名人が亡くなると、同業者の中で、いの一にその故人の伝記が近々出版される旨、

宣伝告知した。もちろんこの手の書き物は、大衆が故人の記憶を生々しく留めている間こそ、よく売れるのを承知しての戦略である。と言っても、無論そんな短期間に一人の伝記を完成させるほど十分な資料を独力で集められるはずはなかった。そこでカールが用いた常套手段とは、

- ①常時三文文士を召し抱えておき、場合によっては彼等に書かせる。
- ②あちらこちらの定期刊行物の記事から少しでも故人に関係のあるネタをかき集め、片っ端から伝記に盛り込む。故人が生前書いた作品があれば、適宜それらも本文に混ぜ込む。
- ③さらに故人の “Last Will and Testament” を末尾に添える。
- ④それでも一冊の書物として厚みが欠ける場合は、“Preface” や “Supplement” などの付録記事を本文の前後に加える。

といったものであった。⁽³⁾そしてこれら①～④の手口と同時進行でカールが用いたのが

- ⑤定期刊行物などを通じて、一般大衆から故人にまつわる情報の提供を広く呼びかける。

という方策であった。このように、著名人の死後には決まって質の低い故人の伝記がカールの手によって出版されたため、John Arbuthnot が “a new terror had been added to death” とやったことは有名である。

①には、Dr. George Sewell, John Oldmixon, John Ozell, Charles Gildon らが含まれており、彼等の多くが *The Dunciad* に名を連ねることになる。また同じくポウプが、三文文士を笑い物にした散文 *Peri Bathos* において、“D. F. L. E. The Hon. E. H.”（それぞれ、Daniel Defoe, Laurence Eusden, Edward Howard を指す）⁽⁴⁾らをも「とても速く走る」ダチョウに喩えているのも、この①に関連してのことだろう。つまり、ポウプの考える三文文士の資質の一つは、有名人が亡くなった際、出版者の求めに応じて、速やかに故人の伝記をでっち上げられる執筆スピード⁽⁵⁾なのであった。因みにここで二番目に槍玉に挙げられているユースデンは、1718年に桂冠詩人に任じられているが、*The Dunciad* の付録記事の一つ “Of the Poet Laureate” において、ポウプは桂冠詩人に求められる第一の資質を “...he must be able to make verses

extempore, and to pour forth innumerable, if requir'd.”と述べている。これも①に表されているカールと三文文士の関係を想起させる。

議論の都合上、次に⑤の実例を挙げておく。カール自身がポウプの伝記を書くに当たり、1733年3月30日付けの *Daily Journal* に載せた世間に協力を請う広告である。

As I intend to write this Life in a Chronological Method, I desire those Gentlemen, who are willing to do Mr. Pope's Character Justice, to be speedy in transmitting what Memoirs they intend, that they may be placed in their proper Order of Time; and shall be faithfully inserted in the Words of the Writers.

注目すべきは引用文中にある「お寄せ頂いた情報は漏れなくそのまま伝記に盛り込む」というカールの姿勢である。一読すると情報提供者の好意に配慮した良心的な言に聞こえるが、実は「情報の真偽について裏付けをとらない」「十分な厚みを確保するだけのネタに困っている」というカールの有り様を図らずも表している。そもそも、他人から提供を受けた情報を「その人の言葉通り、忠実に」伝記に盛り込むというのであれば、カールは作者ではなく編者と呼ばれるべきであろう。

そしてこの広告の結実として、カールは William Ayre という偽名を用いて、ポウプが亡くなった翌年（1745年）に早くも大部な2巻本の伝記を執筆、出版している。そして、匿名の作者による二冊の薄いパンフレットを除くと、これこそ詩人の死後出版された初のポウプ伝であった。⑤の方策を踏襲して世間一般から情報を募った点や、話題の新鮮さに配慮したスピード出版という点を別にしても、この伝記こそ正しく *curlicism*（デフォーの造語である）の権化であった。まず、②との関連では、ポウプの伝記とは直接関わりない脱線や引用、その他余分な記述がやたらに多い。一例を挙げれば、第2巻37ページ辺りはポウプの手紙や作品からの引用が長々と続き、それに若干のコメントや背景説明が加えただけという箇所が見られるし、同じく204ページ以下にはポウプの John Donne の模倣詩が原詩と見開き対照という形式で引用され、8ページ以上の紙幅が割かれている。さらに明らかなページ数稼ぎの便法として、ポウプに係わりのある人物の略伝を載せているのが目立つ。具体的に指摘すると、第1巻199ページ以下には Jonathan Swift の略伝、212ページ以下に Nicholas

Rowe の略伝、第2巻には96ページ以下に John Gay の略伝、201ページ以下にダンダンの略伝、278ページ以下に Richard Savage の略伝という具合である。本稿の冒頭でも述べた通り、伝記は出版屋カールお得意の分野であり、このように各人の伝記を互いの伝記の中で引用することで、それぞれのページ数を増やすことが出来る。おそらくカールの狙いもその点にあったのだろう。(実際カールは1733年にゲイの伝記を出版している。) こうしたカールのポウプ伝の冗長さを受けて、同じ年に出たパンフレットにおいて J. H. なる人物が、この伝記は本来の6倍の高になっており、読者は6分の1の値段でポウプに関係する部分のみを購入したかったであろうに、と述べている。これは、当時のカールの伝記が世間でどのように受け止められていたかを示す証言となるであろう。一方、カールも海千山千の出版屋である。件の伝記の第1巻155ページで、ポウプを取り巻く人物について長々とした説明を加える理由を「ある人物の交友関係を検証することにより、その人についてきちんとした評価を下すことが出来るから」と述べ、あたかも先に引いた J. H. が述べ立てたような批判を見越し、予防線を張っていたかのようである。

③④についても、抜かりがない。エアによるポウプ伝の第2巻383ページ以下には、The Last Will and Testament of Alexander Pope が付けられている。この点、1716年にポウプが執筆した、カールを笑い物にしたパンフレット *A Full and True Account of a Horrid and Barbarous Revenge by Poison, on the Body of Mr. Edmund Curll, Bookseller* と読み比べてみると面白い。実は同年、カールは作者不明の三編の詩の原稿を入手していた。カールはこの中の一編を “the laudable Translator of Homer” すなわちポウプの作品であるかのように宣伝し、三編の詩を *Court Poems* とタイトルを付けて出版した。当時 *The Iliad* の翻訳者として人気の高かった自らの名前を、(おそらく全く覚えのない) 詩集の作者として使われ、その売り上げアップに利用されたポウプは当然激怒した。同じ出版業者 Bernaby Bernard Lintot を介してカールを酒場に呼び出したポウプは、隙を見てカールの飲み物に嘔吐剤を混入する。帰宅したカールは、激しい腹痛と吐き気に見舞われたことであろう。そしてこの顛末を筆者の想像を交えて叙したのが先の *A Full and True Account* なのである。そしてこのパンフレットには “With a Faithful Copy of His Last Will and Testament” という副題が添えられているのである。

(但しエアのポウプ伝の場合とは違い、こちらではカールが臨終の床で遺言を口述する。) このパンフレットの眼目は、カールが他人を題材に出版しような

内容を他ならぬカール自身を檣玉に挙げて伝える、という点にある。③が curlicism の一つとして一般に認知されていたと言えよう。さらに附言しておく、このパンフレットは実際にポウプとカールが酒場で面会した日から二日も経たないうちに出版されているのである。忘れてはならないのは、この出版の素早さもまた先に述べた、書物の売れ行きを左右する要素として話題の新鮮さを重視するカールの出版戦略を茶化している点である。ポウプの mockery はそこまで徹底していた。

さてエアのポウプ伝に話を戻す。第1巻冒頭と末尾には、それぞれ preface と index も置かれている。preface については、盟友スウィフトの次の詩行がポウプ自身の思いを代弁していると言えるだろう。ここでスウィフトは、詩人としての成功を望む者へ、一旦は批評家たちが重きを置く “Preface of Dryden” を読むようアドバイスする。

Read all the *Preface of Dryden*,
For these our Criticks much confide in;
(Tho' merely writ at first for filling,
To raise the Volume's Price a Shilling.)
(*On Poetry: A Rapsody*, 251-4.)

つまり、スウィフトに言わせれば、preface とは書物本体の価格を引き上げるための、ページ数稼ぎ (filling) として、書かれるものなのである。一方 index については、今度は先に触れたパンフレット *A Full and True Account* の続編として、ポウプが出した *A Further Account of the most Deplorable Condition of Mr. Edmund Curll* の記述と比べると面白い。その中でポウプに毒を盛られたカールが臨終に際し、お抱えの三文文士を枕元に集める場面があるが、彼等の中に Index-maker が含まれている。そこで一同はポウプへの報復手段について協議するのだが、件の Index-maker はポウプ訳の *The Iliad* に index を付けることを提案する。一見荒唐無稽の提案に思えるが、それが報復として成り立つ所以に、ポウプがカールの index を駄作の要件として捉えていたことが窺える。

余談だが、Index-maker のこの発言の直前で、同じくポウプへの報復として Historian が彼の伝記を書くことを提案している。index の場合と同様に、ある人の伝記をカールが出版することもその人に対する脅威となり得るという

理屈は、再び我々に「死ぬことに新たな恐怖が付け加わった」というアーバスノットの言葉を思い出させてくれる。また、実際にカールがエアという偽名を使ってポウプ伝を出すのは29年後のことなのだが、あたかもポウプはこの時点で既に自らの伝記がカールによって出版されることを予見していたかのようにある。ポウプとカールは互いに相手の出方を知悉していた。

II

本稿では省略したが、先に引用した *Daily Journal* の広告の前段で、実はカールはある人物からポウプに関する情報提供を既に受けたことを仄めかしている。この「ある人物」は、自称ポウプの元同級生で E. P. と名乗り、ポウプが学童時代に味わった不名誉な経験についての情報提供を申し出たのであった。さらに同じ年の11月、今度は P. T. と名乗る人物がカールに手紙を寄越し、自分が持っている未刊のポウプの書簡を出版しないか、とカールに持ちかける。最初は警戒していたカールも最後にはこの餌に飛びつき、R. S. なる人物が、ポウプの書簡の現物を携えてカールの元を訪れるに及び、1735年についにポウプの書簡集を著者に無断で出版する。

ところが、一連の経緯は全てポウプが仕組んだ計略であった。実はポウプは自らの書簡集を自らの手で出版しなかったのだが、当時は著者自らがその書簡集を出版するなど、許容されるべくもない、はしたない行為であった。それで、彼は一計を案じカールに著者すなわち自分に無断で書簡集の海賊版を出させることで、著者自ら真正版を出さざるを得なくなったという状況を作り上げたのである。つまり先の E. P. や P. T. はポウプ自身、R. S. はポウプに雇われた James Worsdale という人物だったのである。こうしてまんまとカールを罠にはめたポウプは、晴れて1737年に著者自ら authorize した書簡集を出版した。ポウプの企みはそれだけではない。実は1737年の真正版は言うに及ばず、その前に R. S. を介してカールに掴ませていた海賊版においても、自らの世評を良くするために、元々の書簡の内容を改竄していたのである。

ここで注目すべきは、自らの目的を達するためにポウプが採った手法である。E. P. や P. T. という偽名を使った船晦戦術、さらにそれらの偽名を使い、世間一般から情報提供を求めるといふ⑤に挙げたカールの常套手段を逆手に取って接近し、彼を意のままに操った手順、情報を操作して自らのイメージアップを図るやり口、全てカール顔負けの巧みさである。ポウプが主に生活の糧を得るために書くことを潔しとしない、gentleman poet の階層に属していたこと

体的に *The Rape of the Lock* から詩行を引用しながら、この作品がカトリック信仰を含めた国家に災いとなる様々な主義や思想を鼓吹する意図を隠し持っているのを証そうとしている。当時 *The Rape of the Lock* は世間で話題になっており（他ならぬ Barnivelt 自身の言によると、既に6,000部以上売れていた）、その人気に当て込んで、この手の謎解きものを架空の人物になりすまして出すこと自体既にカール的と言えるのだが、それ以上に注目すべきはこの作品の第二版の冒頭に4編の詩が添えられていることである。これらは全て架空の作者 Barnivelt を称える内容（言うことは暗黙裡に *The Rape of the Lock* の作者ポウプを批判する内容）なのだが、実はこれらの詩もポウプ自身書いたものであった。うち2編は筆者が High German Doctor と The Grumbler となっているが、実はこれらはそれぞれ Philip Horneck と Thomas Burnet が執筆していた当時実在の定期刊行物の名前であった。二人はポウプとはいいがみ合っており、後年共に *The Dunciad* にその名を連ねることになる。整理すると、ポウプは自分と敵対関係にある人物の名をかたって、自分を批判するような短詩を *A Key to the Lock* の冒頭に置いているのである。こうした策略を用いることで、ポウプは状況をよりドラマティックなものにするよう謀っているのである。換言すれば、作品がより大きな世間の注目や関心を惹くようにするための工夫である。おそらくポウプのこの作戦は1728年の初版 *The Dunciad* の出版手順についても当てはまる。彼はこの詩に先立ち *Peri Bathos* を世に問うて、予め三文文士たちとの緊張関係を高めていたのである。*Peri Bathos* は当然三文文士からの反撃を招くことが予想され、*The Dunciad* の出版はそれに対するさらなる反撃として正当化され、加えて一連のパンフレット合戦の中に位置付けられる—これこそポウプが *Peri Bathos* 出版に込めた狙いであった。その意味では Samuel Johnson の「もしこの詩において槍玉に挙げられた文士たちが、怒りを押し留めていたなら、*The Dunciad* はあれほど急激に話題になることはなかったろう。しかし、それは望むべくもなかった」という主旨の言葉は当を得たものであった。果たして *The Dunciad* 出版当日、その出版を押し留めようとする文士たちが書店に押し寄せ大変な騒ぎとなった⁽⁹⁾。ポウプの出版戦略が効を奏したと言えよう。そしてこの点、三文文士たちにとっても事情は同じであった。彼等もまたポウプという文壇の寵児をけなすことで、自らの存在をアピールしたのである。

The more we rail, the more bespatter

'Twill make our *Pamphlets* sell the better;
(*Sawney and Colley*)

このように三文文士たちとポウプは互いに反発し合いながらも、著作の売れ行きという面では相互に依存する関係であった。

先に挙げた②③④では、カールが自ら出版する伝記に十分な厚みを確保するための手管を述べた。それはまたポウプが好んで風刺の題材にした、三文文士と出版業者共通に見られる慣習であった。⁽¹⁰⁾ところが、同じ手管はポウプ自身の出版戦略にも看取されるのである。その実例として *The Iliad* の英訳を挙げることが出来る。この企画については当初から経済的な思惑があったことは、ポウプの伝記作家たちも指摘する所である。⁽¹¹⁾そして少しでも実入りを良くするために、ポウプが気にかけてのが書物の厚みであったのだ。ジョンソンは、ポウプ訳の *The Iliad* に付された注釈について、⁽¹²⁾“...they were undoubtedly written to swell the volume” と喝破している。先の②③④で述べたカールの努力に、ポウプ自身も無縁ではいらなかったのである。

また *The Dunciad* に付された膨大な付録記事の問題もある。1729年に出た合注版 *The Dunciad* には本文以外に “Testimonies of Authors,” “Martinus Scriblerus, Of the Poem,” “A Letter to the Publisher” 等の様々な記事が添えられている。そもそも初版で不分明であった人名や事柄を明らかにする注釈を添えて新版を出すこと自体が、先に触れた謎解き物と同じく、初版の人気を当て込んだカールの手口であり、かつそうして添えられた注釈も *The Iliad* の場合と同じく、ページ数を稼ぐための付録記事の一つであると言える。⁽¹³⁾例として、冒頭の “THE DUNCIAD” というタイトルに付された注釈を挙げておく。

THE *Dunciad*, Sic M.S. It may be well disputed whether this be a right Reading. Ought it not rather to be spelled *Dunceiad*, as the Etymology evidently demands? *Dunce* with an *e*, therefore *Dunceiad* with an *e*. That accurate and punctual Man of Letters, the Restorer of *Shakespeare*, constantly observes the preservation of this very Letter *e*, in spelling the Name of his beloved Author, and not like his common careless Editors, with the omission of one, nay sometimes of two *ee*'s [as *Shak'spear*] which is utterly unpardonable...

それでも全文の四分の一程度しか引用していない。要するに Dunciad と綴るべきか、Dunciad とすべきかの問題を論じているだけなのだが、わざわざ William Shakespeare の名前まで持ち出して、長広舌をふるっている。

III

カールとの関係で「経済人ポウプ」という新しい詩人観を考える際に、看過出来ないのは書簡の著作権をめぐる二人の法廷闘争である。著作権については 1710 年に “An Act for the Encouragement of Learning, by Vesting the Copies of Printed Books in the Authors or Purchasers of such Copies, during the Times Therein Mentioned” という長い名前の条例（以下、慣例に従い「アン条例」と呼ぶ）が施行されていた。アン条例は、作家が自らの著作に対して著作権を保有することを初めてはっきりと認めた点で画期的なものであった。これにより、作家は史上初めて marketable な商品、すなわち著作の所有者として認定されたのである。⁽¹⁴⁾そしてこの条例を繰り返し積極的に利用したのが、他ならぬポウプであった。

ポウプは 1741 年カール相手に裁判を起こす。カールはその数日前に、ポウプに無断で彼がアーバスノットやゲイといった友人とやり取りした手紙を含む書簡集を出版していたのだ。本稿では触れなかったが、カールはポウプが Henry Cromwell 宛てに書いた手紙を 1726 年に無断で出版していたし、1735 年にも再びポウプの書簡集を無断で出版していた。（既に見たように、無論後者の場合ポウプがそうするよう画策したのであるが。）度重なるカールの仕業にさすがに堪忍袋の緒が切れたのであろう、ポウプはアン条例を盾に取って、自ら書いた手紙と自らに宛てられた手紙の所有権を主張し、件の書簡集の出版差し止めを求めた。但し先に記した正式な名称にもあるように、この条例は「学芸の奨励」(the Encouragement of Learning) を意図したものであり、果たして書簡が learned work の範疇に入るかどうかは不明瞭であった。加えて、カールのもう一つの言い分は、この書簡集はそもそもイングランドの外、アイルランドで先に出版されており、イングランドの人間が国外で出版された書物をイングランドで再刊しても違法ではない、というものであった。

最終的に大法官 Philip Hardwicke は、“...it would be extremely mischievous, to make a distinction between a book of letters,... and any other learned work.” と述べ、書簡集も先のアン条例の保護の対象となり得るとし、まずこの点はポウプに軍配を上げる。但しそれと同時に、書簡に対するポウプ

の著作権については、ポウプが送った（つまり彼が書いた）手紙に関してのみ認定し、彼が受け取った手紙に関しては認めなかった。さらに「既にアイルランドで出版されたものをイングランドで再刊しても違法ではない」というカールの主張⁽¹⁵⁾に関しては、“very pernicious consequences”を招くものと一蹴する。

以上のように、ポウプがカールを相手取って起こした訴訟は、作家の権利保護という観点から非常に重要な判例を生み出すに至った。因みに「書簡の著作権は書き手に帰属する⁽¹⁶⁾」という原則は、英米の著作権法の立脚点として現在も有効である。彼は単に一冊の著作が生み出す利益にのみ関心があったのではなく、その前提として作家が自らの作品に対して保持するはずの権利をしっかりと確立することにもぬかりがなかったのである。

結語

これまで *A Full and True Account* にカールの “Last Will and Testament” を添えたり、*The Dunciad* に冗長な注釈を付したりした工夫は、単に三文文士連中や悪徳出版業者の手口を mock したものと解されてきた。ポウプの側に彼等の有り様を擬態することで、その弊を暴かんとする意図があったことは疑うべくもない。冒頭で挙げた①から⑤を、カールの常套手段としてポウプも認識していたことは、次の引用からも明らかであろう。

This is a Practice frequent with Booksellers, to swell an Author's Works, in which they have some Property, with any Trash that can be got from any Hand; or where they have no such Works, to procure some. *Curl* has in the same manner since advertiz'd the *Letters* of Mr. *Prior*, and Mr. *Addison*. (*A Narrative of the Method by which Mr. Pope's Private Letters were Procured and Published by Edmund Curl, Bookseller*)⁽¹⁷⁾

しかし、かく言うポウプとて、こうした curlicism と決して無縁ではなかった。余分な付録記事のお陰で膨れ上がった *A Full and True Account* や *A Key to the Lock*, *The Dunciad* を売ることによって、彼もまた何がしかの収入を得ていたことは、論を俟たない。パトロン制度が衰退し、作家が彼等から独立して生計を立てる術を考えなければならなくなった時代、gentleman poet としての矜持は保ちつつも、同時にポウプには経済人としての自覚が芽

生えていた。ポウプの出版戦略は、彼の不倶戴天の敵と目されているカールの所業と並置して見ると、一層際立って来る。“Last Will and Testament”や擬注をめぐるポウプの *mockery* には、自ら嘲笑の対象とした弊に自ら陥りかねない危うさが潜んでいる。

註

- (1) 例えば Ingrassia, “Dissecting the Authorial Body: Pope, Curll, and the Portrait of a ‘Hack Writer’” in *More Solid Learning*, Rose, *Authors and Owners*. など。
- (2) Baines and Rogers 49. また、カールが話題の新鮮さを重視した点に関しては、Henry Fielding の芝居 *The Author’s Farce* (1730) の II-iv 冒頭で、作者がカールをもじった登場人物の出版屋 Bookweight に言わせている次の台詞が示唆的である。“Do you consider, Mr. Quibble, that it is above a Fortnight since your Letter from a Friend in the Country was publish’d. —Is it not high time for an Answer to come out—at this rate, before your Answer is Printed your Letter will be forgot—I love to keep a Controversy up warm—I have had Authors who have writ a Pamphlet in the Morning, answered it in the Afternoon, and compromised the matter at Night.”
- (3) Straus 23-4, 92.
- (4) *Prose Works*, vol. 2, 251. (編者 Cowler による注釈76, 77, 78を参照。)
- (5) “...nothing is of equal consequence to the success of our Works, as *Speed and Dispatch*.” (*Prose Works*, vol. 2, 226.)
- (6) この二冊のパンフレットとはポウプが死んだ年に出た *The Life of Alexander Pope, Esq.: With Remarks on His Works*. と *The Life of Alexander Pope, Esq.: With a True Copy of His Last Will and Testament* というもので、前者は76ページ中、実際の伝記は70ページで、残りはポウプの遺言が占めている。後者も64ページ中、純粋な伝記部分は53ページで、残りは遺言である。他にも引用や脱線の多さなど、カールが得意とした *instant biography* の要素を具備している。
- (7) 拙論「ポウプの出版戦略」を参照。
- (8) *Life of Pope*, para. 146.
- (9) *Twickenham Edition*, vol. 5, xxii. また出口 74. も参照。
- (10) 拙論「『ダンシャッド』における書物の量感をめぐる風刺—ブラックモアを手がかりに—」参照。またこのような慣習については、Jacob Tonson が出した William Shakespeare 全集を批判して、Charles Gildon が発した皮肉 “... according to the laudable Custom of the Trade to swell the Volume and the Price.” が示唆的である。(Lynch 131.)
- (11) Johnson, *Life of Pope*, para. 71, Ruffhead 180. など。
- (12) *Life of Pope*, para. 353. また別の箇所ではジョンソンは “Notes were likewise

to be provided; for the six volumes would have been very little more than six pamphlets without them.”とも述べている。(para. 86.)

- (13) 元々 *The Dunciad* の初版を読んだ Oxford 伯が、著者自身に authorize された *Key to the Dunciad* の出版を望んだのに対し、翌年ポープはこの合注版を出すことでその要望に応えたのである。
- (14) Rose, “The Author in Court: *Pope v. Curll*,” (Woodmansee and Jaszi 213.)
- (15) この裁判におけるポープの訴状と、それに対するカールの弁明、ハードウィックの裁定に関しては、*Authors and Owners* の付録として全文が掲載されている。
- (16) Rose 59-60.
- (17) *Prose Works*, vol. 2, 331. もともと匿名で出た記事であったが、作者がポープであることは明白であった。(編者 Cowler が冒頭に付した “Notes on Publication and Text” における解説参照(325).)

参考文献

- Anonymous. *The Life of Alexander Pope, Esq: With Remarks on His Works*. London: Printed for Weaver Bickerton, 1744. (Rpt. *Popeiana* XXIV. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1974.)
- Anonymous. *The Life of Alexander Pope, Esq, With a True Copy of His Last Will and Testament*. London: Printed for Charles Corbett, 1744. (Rpt. *Popeiana* XXIV. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1974.)
- Ayre, William (Edmund Curll). *Memoirs of the Life and Writings of Alexander Pope*. 2 vols. London: Printed for the Author, and Sold by the Booksellers of London and Westminster, 1745. (Rpt. *Popeiana* XX-XXI. New York and London: Garland Publishing, Inc., 1974.)
- Baines, Paul and Pat Rogers. *Edmund Curll, Bookseller*. Oxford: Clarendon Press, 2007.
- Barnard, John, ed. *Pope: Critical Heritage*. London and Boston: Routledge and Kegan Paul, 1985.
- Curll, Edmund. *The Curliad: A Hypercritic Upon The Dunciad Variorum With a Further Key to the New Characters*. London: Printed for the Author, 1729.
- Fielding, Henry. *Plays*. Oxford: Clarendon Press, 2004-. (in *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*.)
- Foxon, David. *Pope and the Early Eighteenth-Century Book Trade*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- H., J. *Remarks on Squire Ayre's Memoirs of the Life and Writings of Mr. Pope. In a Letter to Mr. Edmund Curl, Bookseller*. London: Printed for M. Cooper, 1745. (Rpt. *Popeiana* XXIV. New York and London: Garland

- Publishing, Inc., 1974.)
- Ingrassia, Catherine and Claudia. N. Thomas, eds. *"More Solid Learning": New Perspectives on Alexander Pope's Dunciad*. London; Associated University Presses, 2000.
- Johnson, Samuel. *The Lives of the Most Eminent English Poets; With Critical Observations on Their Works*. 4 vols. Ed. Roger Lonsdale. Oxford: Clarendon Press, 2006.
- Lynch, Kathleen M. *Jacob Tonson: Kit-Cat Publisher*. Knoxville: U of Tennessee P, 1971.
- Pope, Alexander. *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. 11 vols. Gen. ed. John Butt. London: Methuen; New Haven: Yale UP, 1939-69.
- . *The Prose Works of Alexander Pope*. 2 vols. Ed. Norman Ault and Rosemary Cowler. Oxford: Blackwell; Hamden: Archon Books, 1936-86.
- Rose, Mark. *Authors and Owners: The Invention of Copyright*. Massachusetts and London: Harvard UP, 1993.
- Ruffhead, Owen. *The Life of Alexander Pope*. London: Printed for C. Bathurst, H. Woodfall, W. Strahan, J. and F. Rivington, W. Johnston, B. White, T. Caslon, T. Longman, B. Law, Johnson and Payne, S. Bladon, T. Cadell, and the Executors of A. Millar, 1769. (Rpt. Hildesheim: Georg Olms, 1968.)
- Sherburn, George, ed. *The Correspondence of Alexander Pope*. 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1956.
- Straus, Ralph. *The Unspeakable Curll*. London, Chapman & Hall Ltd, 1927. (Rpt. New York: Augustus M. Kelley • Publishers, 1970.)
- Swift, Jonathan. *The Poems of Jonathan Swift*. 3 vols. Ed. Harold Williams. Oxford: Clarendon Press, 1958.
- Woodmansee, Martha and Peter Jaszi, eds. *The Construction of Authorship: Textual Appropriation in Law and Literature*. Durham and London: Duke UP, 1994.
- 出口保夫「イギリス文芸出版史」研究社, 1985年
- 福本幸之「『ダンシャッド』における書物の量感をめぐる風刺—ブラックモアを手がかりに—」(ALBION 復刊37号, 京大英文学会, 1991年)
- 「ボウプの出版戦略」(『英語青年』2002年5月号特集「イギリス書物革命」, 研究社, 2002年)

キーワード アレグザンダー・ポープ エドマンド・カール 出版